

学会動向

日雇労働者・ホームレス

——社会政策学会第96回大会を
振り返って

松丸 和夫

1

1998年6月6日～7日の2日間、東京の日本大学経済学部において社会政策学会が開催された。昨秋京都の同志社大学で創立100周年記念を迎えた後の本大会の共通論題は、「日雇労働者・ホームレスと現代日本」であった。学会の第2世紀目の皮切りとして、今日の日本社会のあり方へのトータルな問題提起を含む課題設定であった。後掲の通り玉井金五会員がコーディネーターを務め、6つのタイトルのもとに7人の会員が報告した。また、総括討論では、4人のコメンテーターが各報告に対する発言をし、さらにフロアからも熱心な討論が繰り広げられた。私自身、コメンテータの末席を汚した。

「日雇労働者」と「ホームレス」をキーワードとするこの共通論題への関心の高さから、学会会員以外の傍聴者が多数見られたばかりでなく、野宿者支援団体の出店や傍聴者も散見された。

さて、共通論題企画の趣旨について、「報告要旨」では、昨春94回大会の分科会「日雇労働者とホームレス」における東京・名古屋・大阪の実態調査に基づく報告をふまえ、「社会保障や国際労働市場も含む、もう少し大きな視点から」同課題へ接近することと述べられている。さらに、「日本の高度成長を担った労働者が今

どのような境遇に置かれようとしているか、当時構築されつつあった社会制度に包摂しきれなかったことが現在いかなる形で発現してきているのか等々。これらに対する社会政策的な回答（ママ）を与えずして戦後の、いや20世紀の総決算はできないであろう。」とこのテーマの意義について敷衍している。

以下では、一コメンテーターとして「国際比較」の観点からの発言を要請された私の、多少バイアスのかかった紹介コメントを試みたい。

2

第1報告「課題と視角」（岩田正美）は、共通論題全体への課題と方法を前面に押し出したものであった。まず江口英一らの先行研究による社会階層としての「日雇労働者」の摘出の意義について紹介し、この階層は生活保護層に隣接し、その給源となっていたことが示される。それに対して「ホームレス」は、G. L. BlasiやT. Wrightらの見解により「多様な極貧者が示すある存在の状態。ふるまいや外観から社会が区分けするやや曖昧な概念」と整理される。現代日本においては一方で就労の「非正規・フロー化」が進行し、他方で単身「日雇労働者」のホームレス化の進展により、「日雇労働者・ホームレス」は社会への帰属を欠いた「異質な貧困・失業者」として把握されがちである。しかし「日雇労働者・ホームレス」問題は、近代的社会の基本的社会問題の内実をもちながら、社会の支配的な「労働者像」「生活者像」から逸脱した変わり者、自由人として社会の監視や凝視の対象となり、近代の労働問題・貧困問題としての把握の外や周縁におかれることになる。そこで報告者は、「日雇労働者・ホームレス」の内実と現象把握の齟齬を解く視角として以下の5点に沿って展開した。①外観としての「異質性」を構成する要素、②現代社会一般との関

連・特に日本の現在との関連, ③雇用・就業状況, 家族との関連, ④生活空間としての地域支配, 特に都市政策との関係, ⑤福祉国家の諸制度との関連。現代日本のホームレス問題の社会科学研究は, 他の諸科学のアプローチとならんで, さしあたり事実の発見とその意味づけをめぐる議論の端緒にあると考えられる。とすれば, この報告は, 社会政策学会が大会の共通論題に「ホームレス」を取り上げたことの意義を, 積極的に解明しようとしたものである。当日配布資料にある「都市失業を体現する, あるいは被保護層に代表される貧困層の給源としての『不安定就労階層』という社会階層の解体」とは, 高度経済成長期を通じて江口らが唱えた「ベルトの階層」を発見することは, 今日ではもはや困難になったという含みとして受け止めて良いのであろうか。「わたしはそこへいかなかった。何も『山谷』まで出かけなくとも, 身近に, かつて『山谷』がわたしに問いかけたところのものが, 簡単に見られるからだともいえる。」(江口英一「歯止め」『大河内一男集』第6巻月報所収, 1981年1月)

3

第2報告「日雇労働者の高齢化と労働市場」(福原宏幸・中山 徹)は, 日本最大の日雇労働市場大阪あいりん地区・釜ヶ崎における実態調査にもとづき, ①高齢日雇労働者の就労状況(福原)と②日雇労働者の「野宿者」化と社会福祉・社会保障(中山)の二つから成り立っており, 社会構造研究会の一連の「日雇労働者」調査の成果として報告されている。福原報告では, 釜ヶ崎日雇労働市場の動向を過去20年くらいさかのぼって, 日雇労働者の数の推移(1996年で15,130人)と高齢者化(平均年齢54歳)の現状を示した上で, 大阪府・市が実施している55歳以上あいりん地区日雇労働者を対象とする

「特別清掃事業」など就労保障を中心に政府・自治体の政策課題に言及している。中山報告では, 「野宿者」の増加と野宿「生活」の実態を明らかにするとともに, 雇用保険・医療保険の適用の限界や高齢日雇労働者に対する社会福祉の対応の遅れが明らかにされている。例えば, 「西成区高齢者保健推進プラン」(97年7月)においても居住問題への施策が欠落している点や, 横浜市の寿地区におけるホームヘルパーのドヤへの派遣実施への言及など興味深い。政策的課題として, 労働・福祉・医療の総合的施策の必要性を唱え, 居住の確保から社会保険適用の緩和措置や生活保護運用の弾力化, 高齢者の確保, 施策決定プロセスへの労働団体, 支援団体等の参画など貴重な提言が含まれている。本報告は昨年について2度目のペアでの学会報告だが, 必ずしも報告内容の分担がきちんとできていないような印象を受けた。

4

第3報告「建設就業構造の変化と日雇・季節労働者」(椎名 恒)は, 予稿集としての「報告趣旨」には, タイトルしか記されていなかったが, 大会当日に配布された資料と報告内容は, 北海道における建設業季節雇用の実態調査に基づく事実の発見として圧巻であった。報告の前半は, 1970年代以降の日本の建設業における下請構造・雇用構造の変化を豊富なデータをもとに分析している。「就業構造基本調査」から試算した「産業別不安定就業者」数の推移をみると, 建設業においては他の製造業などの産業と比べて不安定就業者の構成比が低下している。建設日雇労働者数が減少し, 「常雇」がウェイトを高めているが, 報告者はその内実として, 「日雇を上回る労務下請労働者」の増大をあげている。それは建設生産組織における下請生産比率の高まりの反映でもある。後半部分は, 報

告者が北海道で実施した調査結果にもとづいている。建設一般北海道本部、北海道建設企業組合の協力を得て実施された調査から、冬期講習制度への参加者を中心に北海道の建設現場労働者の就労類型化を試みている。それによると、ⅠA：無就労層、ⅠB：極少就労層、ⅡA：高齢季節雇用層、ⅡB：追加補充的冬期就労層、Ⅲ：一般季節雇用層、Ⅳ：通年雇用層に分類されている。賃金支払い方法で月給制の比率が過半数を占めるのは、Ⅳの「通年雇用層」だけでそれ以外の累計はすべて日給制が大半を占めている。北海道の季節労働者は、最近の北海道経済の深刻な不況で、通年雇用はもとより季節雇用からものはじき出され、「二重の失業」に陥っており、さらに東京の山谷などへの日雇労働者の給源（「北海道新聞」98年4月18日付）ともなっている。北海道から寄場に出ていった労働者で戻ってくるものは少ないという。この報告は、重量感を聴衆に与えてくれたが、時間の不足からか、最後のホームレス問題との接合が充分でなかったと感じた。

5

第4報告「ホームレスと生活保護行政」（吉村臨兵）は、ドヤに居住する高齢日雇労働者が稼働能力の減退によって「ホームレス化」する理由を、単に経済構造一般に求めるのではなく、現在の社会政策関連行政が構造的にホームレスを生み出しているのだという認識を鮮明にしている点で興味深い。生活保護法それ自体には、被保護者の定住を条件としている部分はないが、半定住的なドヤ生活者を対象と見なすかどうかは自治体や福祉事務所によって判断が異なるという。たとえば、大阪市では、浪速区や阿倍野区ではドヤ保護があり、西成区ではないと紹介されている。しかし、野宿者に対する生活保護の場合、行政単位のバラツキは一層大きく

なる。さらに労働行政と生活保護行政の間に介する大きな溝について、「事実上、失業に起因する生活困窮を排除」しているとし、1994年の「林訴訟」はこうした行政に対する訴えである。日本においては、雇用保険の失業給付と生活保護法による生活扶助には何の関連もない。報告者もいうように、「現状では、失業給付が受けられなくなっても、これに代わって生活扶助などがすぐさま受けられるという制度にはなっていない」。失業から失業給付を受け、その期限が切れ、ドヤ代の支払い不能となって路上生活になって初めて施設収容保護というかたちで生活保護の枠組みに到着する現在の行政では、ホームレスの慢性疾患予防や労働意欲の持続は極めて困難となる。日本では失業者に対する失業時の所得保障としては、雇用保険の失業給付しかないが、ドイツなどのように社会保険としての失業保険による「失業保険金」給付と、その期限が切れた場合の「失業扶助」給付が、失業者を公的扶助（「社会扶助」）受給者となるのを防ぐ機能を果たしていることがもっと知られるべきであろう。日本ではこのクッションがないにもかかわらず、報告にあるように「失業に起因する生活困窮を排除」するのは生活保護行政として大いに問題があるということだ。

6

第5報告「外国人労働者の流入と日本の不安定層」（井口 泰）は、外国人労働者の流入が、日本人労働者とりわけ「不安定層」に与えている影響は少なくないと結論づけている。

報告では、外国人労働者の国内労働市場のアクセス規制の類型として、①ポジティブ・リスト②レーバー・テスト③クオータ・システム④ネガティブ・リストが紹介された。①は日本では全面的に適用され、欧米諸国では会社役員に適用している。この方式は外国人労働者のアク

セス人数を制限することはできないが、職種や条件で限定している。②は主要な欧米諸国の会社役員以外の一般社員や労働者に適用している方式で、当該国言語の使用能力や職業基礎訓練が条件となる。③は数量割当制で、アメリカでは職種別制限、ドイツでは出身国別制限などの例がある。④はタイやインドネシアなど発展途上国の例が紹介された。報告としてのまとまりは理解できたが、共通論題との関わりで取捨している点、外国人労働者の就労実態や生活、特に住居についてホームレス化の兆候あるいは実態はどうなっているのか、「現代日本」をキーワードの一つにするテーマとしてはもう少し触れてもらえることを期待していた。その点少々残念であった。

7

第6報告「フランスの『ホームレス』問題」（都留民子）は、共通論題全体の中では異色である。とくにフランスにおけるホームレス問題を、国際比較の観点から取り上げている。報告者は広島市でホームレスの実態調査を手がけ報告書をまとめている。国際比較を一手に引き受けた報告者は、フランスのホームレスに関する歴史的制度的に詳細な分析をした後で、日本のホームレス問題に対して貴重な提言をしている。①「ホームレス（路上生活者）の問題、そして施策を孤立させて考えて良いか？」②失業問題としての考察の必要――多様な失業対策の必要性③住宅保障のための保証人の確保④高齢者福祉の視点が必要⑤社会復帰のためのねばり強い支援の必要の5点は、なかなか説得力のあるものであった。

しかし、一番印象に残ったのは、どうして日本では日雇労働者「層」というものがこれほど固定化させられ、またホームレスが「特別視」されるのかという点である。日本の「ホームレ

ス」が、現象として路上や河岸にダンボールやシートを構えて生活する人々に限定されて理解されがちなのに対して、フランスやドイツなどヨーロッパ諸国では、非衛生的で狭小な住居に住んだり立ち退きを求められている人々、総じて人間生活に欠かせない住居が人間らしい生活にふさわしく用意されていない人々のことをホームレス（フランスではSDF：sans domicile fixé、ドイツではObdachlose屋根のない人々）と呼んでいるのとは大きな違いである。

8

二日間の全報告と討論をフォローすることは至難の業である。いずれの報告者も「時間とのたたかい」を迫られ、コメンテーターも4人で30分の持ち時間では不十分であったと思われる。多方面からのテーマへのアプローチが要求されたのであろうが、報告者が実質的に7人というのは、結果として全体の組立をやや散漫にしたのではないだろうか。報告の流れとして、初日の午後に2本、二日目の午前中に3本、午後に1本と中断が多く、全体の流れをつかむのはなかなか難しかった。

総括討論をふまえた学会大会としての成果は、次年度の『学会年報』に集約されるだろうから、最後に当日コメンテーターとして言い尽くせなかったこと、その後経験したことを若干述べて終りとしたい。

今回の学会に参加して、私なりに得たものは、バブル経済が崩壊した後の長期不況のもとで、日雇労働者・ホームレスの生活状態は悪化してきており、日本社会における貧困や社会問題が後景に退けられた時代から、再び注目を浴びるべき時代が到来したのだと実感できたことである。日雇労働者・ホームレスの状態は、日本の国民生活の現状にとって深い政策課題を提起しているものと思う。ふたつめには、もう20年近

く以前のことになると思うが、山谷のホームレスの越冬収容施設で、真冬にアオカンをしていて収容された人々に健康状態や職歴・生活歴などを一労働力としてインタビューした時の記憶が蘇ったことである。学会大会が終わって二月ほどたった8月のある暑い日の午後、私は久しぶりに東京の山谷を学生9人と訪ねてみた。山谷のボランティア団体の知人と一緒に、隅田川堤のブルー・シート小屋の団地をまわり、カッ

プ麺を1000食ほど配って歩いた。ずいぶんしっかりした作りのテント小屋も多く見られた。ブロックごとに世話やき係りのような人物がいて、留守宅への「届け物」を預かってもらった。人懐っこく話しかけられ、深く何度も何度も頭を下げるホームレス男性に、忘れかけていた懐かしい人間の表情を見たような気がする。

(まつまる・かずお 中央大学経済学部教授)

〔付記〕

社会政策学会 第96回大会プログラム

会場：日本大学 経済学部

第1日 6月6日(土)

《テーマ別分科会》

【第1分科会】戦後日本労使関係史像——近年の成果をめぐって

1. 経済史研究と労働史研究——戦後の日本を対象として
2. 社会福祉の観点から
3. 近年の労使関係研究が見落としたもの
——イタリア労働組合運動史の観点から

座長 佐口 和郎 (東京大)
橘川 武郎 (東京大)
菅沼 隆 (立教大)
斉藤 隆夫 (群馬大)

【第2分科会】福祉国家とジェンダー

1. 福祉国家のジェンダー化——80年代以降の研究動向
2. 日本型福祉国家財政とジェンダー

座長 木本喜美子 (一橋大)
深沢 和子 (阪南大)
神野 直彦 (東京大)

コメンテーター 大沢 真理 (東京大)

【第3分科会】ワンペアレント・ファミリーの家計・生活・意識

1. ワンペアレント・ファミリーの家計と家計管理
2. 養育費制度の現状と課題
3. ワンペアレント・ファミリーの生活世界の内側
——国際比較を中心にして
4. 家族規範と家族類型

座長 埋橋 孝文 (大阪産業大)
馬場 康彦 (日本福祉大)
木村 清美 (大阪産業大)
濱本知寿香 (家計経済研究所)

埋橋 孝文 (大阪産業大)

色川 卓男 (静岡大)

コメンテーター 大塩 まゆみ (滋賀文化短期大)

【第4分科会】非定型労働の今日の問題

1. 家内労働者・在宅テレワーカー・インデペンデントコントラクター
2. わが国における派遣労働問題

座長 永山 利和 (日本大)
神尾 京子 (家内労働問題研究会)
長井 偉訓 (愛媛大)

3. アメリカにおける非定型労働問題の現状

仲野 組子（同志社大）

《自由論題》

【第1会場】ジェンダー

1. 福祉国家の規範理論とジェンダー
2. 官製フェミニズムの到達と限界
——フィンランドの女性労働の特徴と課題に関する一考察

山森 亮（京都大大学院）

高橋 睦子（宮崎国際大）

【第2会場】高齢問題

1. 医療支出を中心とした老後生計費に関する一考察
——世帯主年齢階級別消費支出の分析によるアプローチ
2. 年金政策の負担・給付システムをめぐる諸論点の検討
3. 東京23区における高齢者の経済的地位について
——年金、収入、就業、子との同居を中心に

山本 克也（早稲田大大学院）

田中きよむ（高知大）

塚原 康博（明治大）

【第3会場】医療・福祉

1. 日本における医師の配置・移動構造——医局制度の分析を通じて
2. 看護、介護の本質からみた新しい看（介）護職員教育システムの提言
3. 保健・医療・福祉複合体——全国調査に基づく評価と将来予測

猪飼 周平（東京大大学院）

高木 和美（サンビレッジ国際福祉専門学校）

二木 立（日本福祉大）

【第4会場】労働市場

1. 90年代の新規大卒労働市場——学校歴格差と企業の採用行動
2. 日雇労働者と社会保障——釜ヶ崎における展開と現状から

松尾 孝一（京都大大学院）

上畑 恵宣（高野山大）

【第5会場】諸外国の社会政策

1. 中国における社会保険制度の史的展開過程（1951—81年）
2. 1990年代以降におけるアメリカ労資関係
——グローバル化（大競争）と情報ネットワーク化の下での統計と事例の分析
3. ビスマルク社会保険の労働者階級への影響，1885—1914年

焦 培欣（中央大大学院）

杉山 清（名城大）

小柳 治宣（日本大）

《共通論題》「日雇労働者・ホームレスと現代日本」（コーディネーター 玉井金五）

【第1セッション】

座長 庄谷 怜子（神戸女子大）

1. 課題と視角
2. 日雇労働者の高齢化と労働市場——大阪に則して

岩田 正美（日本女子大）

福原 宏幸（大阪市立大）

中山 徹（大阪府立大）

第2日 6月7日（日）

《共通論題》「日雇労働者・ホームレスと現代日本」

【第2セッション】

3. 建設就業構造の変化と日雇・季節労働者
4. ホームレスと生活保護行政
5. 外国人労働者の流入と日本の不安定層

椎名 恒（北海道大）

吉村 臨兵（奈良産業大）

井口 泰（関西学院大）

【第3セッション】

6. フランスの「ホームレス」問題

都留 民子 (広島女子大)

総括討論

- コメンテーター
- (1) ホームレス・労働市場の視点から
 - (2) 社会保障の視点から
 - (3) 家族・地域の視点から
 - (4) 国際比較の視点から

座長 庄谷 怜子 (神戸女子大)
下田平裕身 (日本女子大)
山森 亮 (京都大学大学院)
黒田 慶子 (立命館大)
松丸 和夫 (中央大)

▼『共産党宣言』一五〇周年記念出版

篠原敏昭・石塚正英編

AS判・320頁・税別38800円

共産党宣言——解釈の革新

あらためて『宣言』に歴史的考察を加え、そこに含まれる様々な今日の可能性を探り出し提示

第1部 概念・理論・思想

- 『共産党宣言』の共産主義者「個人的所有」と「協同体」
- 『共産党宣言』とブルジョア社会主義者との関係
- 『共産党宣言』と共産主義者同盟 同盟の理論的展開から
- 社会主義と共産主義という言葉 — 一八四〇年代のドイツ

第2部 組織・運動・展開

- 共産党宣言は共産主義者宣言である——共産党宣言と政党の脱離
- プロレタリアートの「国民性」をめぐる
- 『共産党宣言』とイギリス——最初の英語訳——一八五〇年——
- 『共産党宣言』とアナキズム——フライハイ特派による解釈——一八八三年——

石塚正英 篠原敏昭 榎村邦彦 岡本充弘 田中ひかる

▼ロシア革命八〇周年記念出版

社会主義理論学会編

AS判・320頁・税別46000円

二〇世紀社会主義の意味を問う

二〇世紀社会主義体制とは何だったのか。その省察と歴史の意味を問う

第一部 シンボリズム

- 二〇世紀社会主義とは何であったか
- 二〇世紀社会主義研究の基礎視座
- ソ連経済の経験とこれからの社会主義
- 社会主義とこれからの社会主義

第二部 論文

- 『社会主義』計画経済は誤り——ソ連邦の経済建設の教訓——
- 中央アジア社会主義の二〇世紀
- 変貌した中国とその行方——中華人民共和国の存続の可能性——
- 富田事件とAB団——中国初期革命運動における綱領問題の教訓——
- 社会主義と自主管理——改めてユーゴ自治体社会主義の意味を問う——
- イタリアにおける「自治体社会主義」とグラマンの社会主義像
- 二〇世紀の欧州社会民主主義の検証——ドイツ社会民主党(SPD)の党史の幾つかの問題に寄せて——

石井伸男 伊藤誠 加藤哲一 西川伸一 藤井誠 伊藤誠 加藤哲一 西川伸一

▼近刊案内 五月二五日刊

的場昭弘・高草木光一編

AS判・(予定)38800円

一八四八年革命の射程

第一部 一八四八年革命を捉える眼

第二部 一八四八年革命の世界的展開

第三部 的場昭弘・黒須純一郎・高草木光一・村上俊介・石塚正英・山井敏章

【執筆者】的場昭弘・黒須純一郎・高草木光一・村上俊介・石塚正英・山井敏章・田中伊知朗・柴田隆行・篠原敏昭

御茶の水書房 〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20

電話03(5684)0751/FAX03(5684)0753